

震災を経て……

阿部知佳子

宮城県石巻市

二〇一一年三月十一日午後二時四十分。東日本大震災が起きました。あれから三年、私たち家族の生活は一変しました。当時、私は保育士として保育所に勤務し、二人の子どもたちも保育所に入所していました。子どもたちの通っている保育所までは、私の職場から車で五分ほど。しかし、震災のあの日、子どもたちに会うまでとても長い一日となりました。子どもの命を預かる仕事をしているため、わが子のごころにすぐには行けなかったのです。

安否を確認できたのは、子どもたちがいた保育所に、自らが勤務していた保育所の子どもたちを連れて避難したからでした。雪の降るなか、「津波がこない間に」と必死で子どもたちを連れ、歩いて行ったことをいまでも忘れません。子どもたちがいる保育所に到着すると、当時、年長だった娘の「マ

マ、遅いよ……」年少だった息子の「帰ろう」の一言。言葉が出てきませんでした。

地震と津波により、自宅のある地区への道は閉ざされ、同居していた両親とは連絡もつかず、避難所での生活を余儀なくされたとき、山形県に住む叔父が迎えに来てくれました。震災で町がおちついていないことや、四月に小学校入学をひかえている娘のことを心配し、山形への避難を勧められました。やっと連絡のついた両親とも相談し、親子三人で山形への避難を決めました。

一人親家庭としての避難生活は、いままでは違っ生活となりました。震災前は、仕事をしていても、子どもたちの送り迎えなどは両親に協力してもらっていました。しかし山形ではすべてが初めてで、不安だらけでした。

震災後、子どもたちは、嘔吐、下痢をくり返しました。娘は、一人でトイレへ行ってもできませんでした。そんな毎日をおくりながら、少しずつ生活にも慣れはじめた頃、私は仕事探しをはじめ、学童保育指導員の仕事を紹介してもらいました。

仕事の開始とともに、娘も学童保育への入所が決まりました。保育所とは違い、今度は小学生との関わりということで、とまどいもありましたが、私の勤務した東根市にある大富わらしっこクラブの職員の方々は、とても親身に私と私の子どもたちを受け入れてくれました。学童保育の仕事のあり方や子どもたちへの接し方など、保育士と違っあり方を得ることができました。また、娘が夏休み後に学童保育に行くのをいやがった際には、入所していた学童保育の指導員の先生方にいろいろ

とご迷惑をおかけしましたが、母として、また、指導員として、いろいろなことを考えることができました。

本場にいろいろなことがありました。山形で一年、避難生活をおくった石巻に戻ってきてから、二年が経ちます。私はまた、保育士として保育園で勤務をはじめました。住居も、以前いた地域ではないところに家を建てることができ、子どもたちもおちつきました。石巻では、以前は三年生までだった学童クラブの対象学年が四年生までとなり、娘は入所はしていませんが、息子が入所しています。公設公営で、学校の敷地内に学童クラブがあります。私の仕事が終わるのが遅いこともあり、息子のお迎えは娘がしてくれています。震災が嘘のように、生活はおちついてきましたが、子どもの心には大きな影響を与えています。

何気ないドライブ中、キラキラしている川を見て、「きれいだね」と言っただけで、娘が一言、「川や海なんかなくなればいい……」「どうして……」「津波を起すから。嫌い」「……。娘には、しっかりと記憶に残っています。震災によって経験をしながらも、避難所生活や転校。生活が一変したことに對する思いをその言葉から感じました。

娘だけではなく、たくさんの子どものたちが震災を経験したことで、いろいろな思いを抱えています。さまざまに経験をj経て、私は保育士として、人の命を預かる仕事を誇りを持って続けていきたいと思ひます。そして、この場をお借りして、支えてくださったたくさんの方々へ感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。